
気付き

hopmatu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氣付き

【著者名】

hopmatu

【あらすじ】

三十歳王手。私は本当の自分と向き合ひの覚悟をした。自分自身の本音に蓋をしてきたしわ寄せが生き難さの原因だったと気付いたのである。自分らしく生きるってどういふこと?もがき苦しむ中に自己の気づきが生まれてくる。自分の足でしつかり立つて前進していくたい!...「生きる」という事を深く考える事のできるストーリーである。

孤独との戦いの始まり

「大阪の夏は暑いで一覚悟せなあかんで。」

「ええ～～ やだなあ。てか金沢の夏は涼しいんだつたつけ…。」

記憶障害なのか？まだ大阪に来て2ヶ月余りなのに地元の夏が思い出せない。

今は梅雨の真っ只中。

通勤電車に慣れたとは言え、この時期はかなりの不快感。

地元は田舎故、地下鉄がなく車の移動が主だった。

大阪では車は不要と売つてきたけど、車はやっぱ快適だつたな…。

地元を離れた小さな後悔がジワジワ押し寄せてくる今日この頃。

私は今日29歳を迎えた。

この歳にして、生まれて初めての「〇」という仕事に就いて1週間。会社で黙々と仕事をこなし覚える事で脳みそが溶け出しそうな中、29歳を迎えた。

「三十路、王手！」心でそう叫びながら残業している自分に何も感じない。

この歳で誕生日に血が騒ぐ方がおかしいのだ。

一人の部屋に戻ると地元の友人から米が届いたらしく、宅急便の不在通知が投函されていた。

「誕生日プレゼントに米。ウケるう。」そう言いながら涙がとめどなく流れた。

私はズバリ病んでいる。

病んでいるから人生をリセットする為に全てを捨てて逃げてきた。

私は山野 麻矢。

地元で音楽教室を運営していた経歴あり。

音大を卒業して6年間、音楽教室講師しか経験した事がない私が今は〇しをしている。

世間知らずな自分を田の辺たりにしつつ、毎日手探りながら順応しようと必死に生きてる。

約30名の子供から大人の生徒を抱え、仕事に遣り甲斐を見出していた。

沢山の人から信頼を得ていて自信と幸福感に満ち溢れていた。
いや、そう思い込もうといっていた。

薄情だが気付いた以上、続けられる気がしなくなつたのである。
私は潔く教室をたたみ、大阪に身一つで逃げ出してきた。

きつかけ

私は子供の頃の記憶が少し途切れている。でも出身は大阪だったことは鮮明に覚えている。

両親は金沢出身だが、結婚を反対された一人は大阪で駆け落ちをして私が出来た。

娘の私だけが大阪出身である。

大阪にいた頃、母は父の仕事の電話番を任せていたから自宅を出る事ができず、夕飯の買物以外はマンションを1歩も出なかつた。一人娘の私は幼稚園へ行くまで常に一人遊びをしていた。

それが当たり前だと思っていた私は何の不満もなかつたが、母は相当なストレスに苦しみ、時にヒステリーを引き起こした。

「どうしてお片づけしないの？何度も言つたらわかるの？お母さんの言つ事が聞けない子はお仕置きよ！」

私は玄関から外に投げ出され鍵をかけられたり、夜でも暗いベランダに出され閉じ込められる事が多々あつた。

その度に「いい子にするから許して……。お母さんゴメンナサイ。もうしません——。」私はドアを叩いて泣いて訴えた。

それでも母はなかなか中へは入れてくれなかつた。

そんな時の母の形相は別人の様に変わつていて、私を憎んでいるのかと錯覚する程だつた。

この記憶もつい最近になって蘇つてきたものだ。

あまりいい思い出もない大阪に何故戻ってきたのかはまだ分からない。

でも、体は勝手に大阪へ出向いていた……。

そもそも何故実家を離れたかというと、両親が離婚したからだ。三人家族がバラバラになつた。

それが根底にある理由だ。

でも地元を離れる必要はないかもしれない。

ましてや両親に何かあつても飛んでいく事もできない。
いや、飛んで行けないから…行きたくないから離れた。

私は氷のような薄情な悲しい人間だ。

日々自分を責めながら大阪で生活している。
自己否定を繰り返しながらの毎日…

自分がみつからない。

私は一体誰なんだろう…これからどうしたいのだろう…

恋愛パターン

自己否定ばかりして恋愛なんかできるわけないんだけど、それなりに男性経験は豊富な私。

ただ、恋愛パターンはいつも同じ。

追われると冷める…。

ここ2年以上本気で付き合つた男はいない。
デートは重ねても何だか虚しさだけが残る。

でも、大阪で一人暮らしを始めて心から恋愛を欲するようになってきた。

単に寂しいから錯覚なのだろうか…

いや、少しずつだけど自分の中の何かが変わり始めている証拠だろう…

一番近くで本気で愛した男は元旦那である。
そう、私はバツイチなのだ。

私は22歳と言う年齢で若くして嫁に出た経験がある。

彼と出会ったのはナンパだった。

一番遊び盛りだった頃、よく親友と二人で明け方まで遊び呆けて最後の締めに一杯のお茶漬けを分け合つて食べた。

「もう遊び飽きたねーーー。お金もないしさーー。」

「だなーー。うちら、こんなんじや一生嫁に行かんやろな。ダメ人間ーー。」

こんな会話をしながらお茶漬けを食べる私達に一人の男が声を掛けた。

「ねーねー。お金ないの?お茶漬けもう一杯おごつたげるからさー、今から4人でカラオケ行かない?」

「行く行く行く!!」私達はお茶漬け一杯で釣られてやつた。

カラオケボックスでは『ごく普通に盛り上がりつて楽しく過ぐ』した。

帰りに携帯番号を交換してあつさり解散。でも何故か胸がざわついた。

こんな気持ちは久々だった。

もしかして恋?

中学時代、上級生に一日惚れして2年間ずっと振られ続けた経験から、ひく人に好きになつてなかつたなあ…。この気持ちを大切にしたい。

彼から連絡がありますように…心からそう祈つた。

翌日の夜。

携帯のベルが鳴つた。彼からだ!

高鳴る胸を押さえながら電話に出た。

「もし・・もし?」

「あ、オレ。ビッちかわかる?」

「声で分かるよ。」

「マジ?嬉しいな。麻矢ちゃん可愛いし絶対彼氏いるだろ?し迷惑かもしけないけど…。」

「い、いないよそんなのっ!!」

「ほんとに?じゃあ今からドライブでもしない?」

「行く…どこまで行けばいい?」

「近くまで迎えに行くよ。」

あまりの急展開に頭が真っ白になつた。

寝る寸前のヒドイ格好でいる自分に気付く我に返つた。

慌ててメイクをし、着替えて彼と落ち合ひの場所へ向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1834a/>

気付き

2010年10月17日05時11分発行